

The Magician 覚え書

佐 藤 匡

彼二東三文のプロメシユースは怒った、動揺する思いに心臓をかまれて、人生の神秘に透徹しようと努力しながら。

—『作家の手帖』 1901年某日

1

モームは、*Liza of Lambeth*, (1897), *Mrs. Craddock*, (1902) で名声定まり、有望な作家としての生活を楽しんだ。しかし、その型にはまった生活に飽き足らず、30才パリーに脱出した。パリー滞在中、Le Chat Blanc というcaféで芸術家達と交わり、その中にはArnold Bennett がおり、この小説のモデルのAleister Crowleyがいた。彼は容貌魁偉で、法螺吹きの子僧であり、ケムブリッジ出で、詩人でもあり、Swinburne, R. Browning ばりの詩をかいた。奇行の持主で、これを語るのが好きだった。モームは彼が好きにはなれなかったが首尾一貫していない人間に強くひかれる性質であったから、興味は寄せていた。しかも、彼Crowleyは、当時パリーに流行していた悪魔崇拝、魔術、神秘主義に手を染めていた。その流行をもたらしたと思われたHuysmansの『かなた』(Lá-Bas)をモームは愛読した。この書物は、十五世紀の奇人ジル・ド・レエ⁽¹⁾(Gilles de Rais)の一代記で、悪魔崇拝、錬金術、呪咀、神秘学など中世紀的靈魂の究極を探求したものであった。しかも、モームはユイスマンスに⁽²⁾対して並々ならぬ尊敬があったと思われる。ここにOliver Haddo, the magicianの誕生の契機があったと考えられるが、更に、内面的に、彼の精神背景を探って、かような異様な題材を取り上げた意図を明らかにしたいと思う。

註

- (1) この作品中では、Dr. Porhoëtが、Gilles について、悪魔へ人間を犠牲にした、恐るべき人間として、数行ではあるが、言及している。
- (2) 上田勤『モーム』、研究社、43頁参照。

2

人生の神秘を求める、モームの内部葛藤が、神秘思想と科学思想との対決、中世と近代の相剋に迫っているのがこの作品の主要なテーマと考えられる時、魔術師Haddoに対する重要な人物として、Arthur Burdonなる聖ロカ病院勤務の著名な外科医が登場させられる。舞台は当然奇怪なる人物の集中するパリーである。Arthur は、フランス外科手術の研究でパリーに来たのだが、真の目的は許嫁のMargaretとの結婚の具体的な取決めにあった。彼女には、常識豊かなSusie Boydなる女友人がいる。Arthurには、老齡の友人、Dr. Porhoëtがおり、Haddoと同じくオカルティストであり、人生へ広い肯定的理解を示し、ユーモアのセンスを有している。Haddoすら、そのモデルを得た今日、ここに登場する人物は皆、モームの葉籠中の者ばかりである。Susie は、一見してArthurを好ましく思い、Margaretは、Haddoにひどい肉体的嫌悪を覚える。波乱が予想される。案の定HaddoとArthurとは反省し、Margaretの愛犬テリヤのことから、HaddoはArthurに復讐を誓い、残酷な仕打ちに出る。策略をめぐらし、ヒプノティズムでMargaretを奪い結婚しロンドンに去る。Susieは旅行に出る。Arthurは苦悩にたえる為に仕事にいそむ。SusieとArthurはロンドンで、後、Haddo夫妻に出会い、ArthurはMargaretをワイト島の近くに連れ出すが、彼女は結局、Haddoの所に帰る。Susieは、Dr. Porhoëtの助けを借りて、オカルティズムに首を突込む。ArthurはHaddoの田舎家を訪れ、Margaretを待ち伏せ彼女にあい、救出しようとするが彼女は拒む。Arthurは、Susie、Dr. Porhoëtの許に急ぎ、Margaretの身の危険を告げ、彼等と共にHaddoの田舎へと行く。Mrs. Haddoの急死を知り、その死因探究にDr. Porhoëtのオカル

ティズムの智識を借り Margaret は Haddo の実験の為に殺されたことが分り、Arthur は射殺という最後手段に訴えようとする時、突然 Haddo が現われ、Arthur は格闘の末、彼をしめ殺すが、彼の死体は見当らず、二人を促し Haddo 邸を探り、彼の屍体を確認し火を放って邸外に去る。復讐という動機にみちびかれ、Margaret を奪い結婚迄した人間的魔術師 Haddo が、彼女の生命と引きかえに、homunculi なる人間を作り得て、生命の神秘を知るに至った獣的魔術師への変貌は、ワイルドの『ドリアン・グレイの画像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891) を思わせるものがある。

3

ユイスマンスは、最初は自然主義作家であったが、『かなた』(Là-Bas) を書いて、神を発見し、神秘カトリック作家として再出発するのであるが、モームはそうでなかった。元来、性格的に神秘の世界よりは、現実の世界に愛着が強かった。その作家が突如として、魔術という神秘の世界を取り上げたことは、たゞたゞ我々を狼狽させるばかりである。作品には、自律性があるわけで、魔術師 Haddo は、モームの手を離れて独自の世界を生きて行くことが出来てもよい筈である。しかし、バリー時代の若いモームの精神的背景と対比させて考える時、この異様な題材を取り上げたことは必ずしも偶然ではないと言わざるを得ない。医学的教養を身につけ、近代科学の洗礼を受けているモームがオカルティズムに接近した経緯を暗示していると思われる次の Dr. Porhoët の発言は意味深い。「私はいつも、人間の異常さに興味を持って来た。一時、私は、哲学と科学をたくさん読み、その結果は何も確認出来ないということだった。科学の研究によって、人間の威厳にうたれるものもあるが、私は、たゞ人間の無意味な存在に気づいただけであった。重大な問題は、人類の文明の初めから考究されて来たが、相変らず解決の道から程遠い。人間は知ることが出来ない、彼の感覚が智識への唯一つの手段なのだし、それらの感覚には、全然確実性が

ないからである。個人が権威をもって語れることの出来るものが只一つある。それは自分の心だが、それでさえ暗黒に包まれている。私は信じる、我々がもっとも知るべきである事柄については、いつも無知であろうと。だからそういったものに頭をなやまさない。そういうことはさておいて、愚にもつかないことだけに懸命になっているのだ。」(本書第五章)ここに、もられている考え方はすべて当時のモームの達していた懐疑的態度そのものであり、知性の彼方にいつも横たわる神秘におびえている彼の心が、神秘の世界に君臨している超人的魔術師にひそやかな憧憬を寄せることがあっても不思議はなからう。下ばかり見ているだけでは能がない、上を見て歩いてもよいではないかとのユイスマンスの意見は、天啓にも似た感動を彼に与えたことであろう。だから、作品中に見られる魔術の世界に自らの彼の人生観が反映され、独自の世界が展開されているのは当然というべきである。これらの例のいくつかを示すことにする。例えば「要するに各人が各人の為にそれぞれ宇宙の中心なのだ。……出来ることなら何をしてもよいのだ。……一方には社会があり、一方には個人がある。それぞれ自己存続を求めて闘っている有機体なのだ。⁽¹⁾力対力。」という考え方は、Haddoの次のような魔術師観に同様の響きがある。「錬金術師は黄金を求め、それは力が欲しいからであり、力こそ彼の夢のすべてであり、全世界を支配する力であり、神自身をも支配する力である。人間がこの世で求めるものは力以外に何があるか。彼等が金を欲するのは只それに伴う力のためだけである。彼等の求める智識も力を得るためのものである。愚者や、のんたくれは幸福を求めるが、男らしい男は力だけを追求する。賢者、錬金術師、魔法使は知られざる世界の魅力にとりつかれている。そして彼等は辛棒強く研究する科学により、忍耐力により、体力により、意志の力、想像力により、即ち、これらの魔術師の大事な武器により、神自身に対抗出来る力を獲得することが可能なのだ。」

(本書第七章) Haddo が homunculi を作りたいという時、それはとりも直さず、創造主と同一の力を持ちたいということであり、その効用を問わずという

態度は当時、モームの心を占めていた人生の追求する目的は快楽に帰すという快楽主義を反映する。又、Haddo の言葉、「科学は只一般的なことを扱い、圧倒的多数の場合、矛盾する個々の場合を考慮しない。時々心臓は体の右側にあるが、その為にあなたは聴診器をそこにあてようとはしないだろう。又恐らく、引力の作用のあてはまらない場合でも、いつもの確信通りに行動するであろう。」(本書三章)とは、モームの聖トマス医学校での科学に対する失望の教訓でもあった。

尚、これらにうかがわれるモームの物の見方は、いちじるしく反世間的であり、因襲的態度に敢然はむかったものの人生観である。実人生への否定的態度は、懐疑精神と相俟って現実不信となり、必然的に仮象の世界への崇拜とならねばなるまい。仮象の世界に安住する為の熱意は、やがて、次の Haddo の言葉に示される人生観とならざるを得ないだろう。「人生にあるのは、只仮象だけ、現象はない。魔法とは意識では見えない手段を用いて、見えるような結果を生じさせる技術にすぎない。意志・愛・想像力は誰しも有する魔術的力であり、魔術師はそれを十二分に発展させる方法を知っているものである。魔術の一つのドグマはこうである、即ち見えるものは見えざるものの目安である。」(本書第三章)又、以上のべたようなモームの考え方と抵触する、いわばモーム的魔術師の世界を作り上げたことは、近代に中世紀の遺物の再認識を、近代的世界観の衣で容易ならしめると同時に、その点にモームの並々ならぬ関心があったことを示している。次の様な魔術師の言葉は、近代に登場した魔術師の面目躍如たる発言であろう。「近代の科学の応用と、我々のすぐれた技術とを以てし、その勇気があれば不可能なことがあるだろうか。現に実験室では死んだ物質から原形質を、即ち無機物から有機体を作り出している。私は彼等の実験を研究した。彼等の知っていることは、すべて知った。昔の魔法の達人達の知識と近代の科学の発見とを合わせて大規模に研究すべきではなからうか。」(本書第七章)

この意味に於ても、魔術師 Haddo と科学者 Arthur との対立は重要なテーマとなっている。

註

(1) *Of Human Bondage*, XLV. Cronshawの言葉。

4

超人 Haddo と Arthur とでは、最初から勝負が決まっているということではなくて、皮肉な経路で Arthur は破れたと考えられる。美男美女の恋が超人により邪魔されるというのでは、とんでもない茶番狂言になり、Arthur の Margaret に対する憔悴も底の浅いものになってしまうが、現実主義者 Arthur は、その本領をはなれ、Haddo の神秘の世界に入り、その力を仰がねばならぬ立場に追いやられる。Arthur の悲劇はこのことにより、一層深刻になったというべきである。Susie と、ハッピー・エンディングに終るであろうという予測も決して我々の心を明るくはさしてくれない。一途に医学だけに打込んで来て、他の一切のことに興味を抱かずに過して来た Arthur は、すこぶる散文的な男で Dr. Porhoët から画をかく Margaret との結婚を皮肉られる位であった。これは一つの伏線で、Margaret が Haddo の術中におちた時、平凡な、退屈な Arthur との結婚生活を嫌悪した呪いとなつていく。大体にこの作品には伏線が多すぎる程である。この絵心のない Arthur が La Diane de Gabies が Margaret の容姿に似ているのにひかれてじっと見入り、彼女がか程にまで美しくなければよいがと願い、何事かが起って、我々の幸福の邪魔をするのではなすかろうかともらしたりするのも明瞭に伏線をなしている。こういう伏線が連続すると、作者が異様な題材を盛ったプロットの展開をなめらかにする故意の技巧か或は、そのようにして、読者の集中力を引きつけて行く技巧なのかと考えたくなる程である。しかし、この作品に於ては、これらの伏線も結果的には効をおさめているように思われるのは、作者の話の進め方が巧みなせいであろうか。さ

前に戻って、そういう不安を感じさせながらも、Margaret の容姿は、いよいよ美しく、彼の心をゆすり、Haddo と結婚する前夜には、その素振りを見せないどころか、普通よりも一段と華やかに振舞い、Arthur のすべての不安を一掃させてしまう程愉快的な晩を送るのだが、翌朝には、彼女は Haddo との結婚を彼に知らせる。又、彼女を救い出すのだが土壇場で Haddo の所に帰られ、Haddo は金持ちであり、彼女の選んだ夫であればしかたがないと無理に納得はするが、Arthur は、愛の誓の空しさ、漠然たる女性不信、神秘的な女心といったもので、これらがすべて魔力でそうになっているとは知りつゝも、やっと、現実の世界の背後の世界に気づき始めたと考えられるのである。こういう洗礼の後であればこそ、彼の取った彼らしからぬ行為も容易に理解されるというものであろう。Dr. Porhoët の母の死の際、魔術師の magic mirror をのぞいたのは少年の頃の自分であったことを思い出し、Dr. Porhoët のオカルティズムの知識の助力を仰ぎ、Margaret の死因を探る件は、極めて劇的なパセティックな場面である。Haddo は、オカルティズムに近代科学の応用を考えていたが、Arthur はこの逆を行くことに反対していたのだから、尚更、彼の敗北は悲惨であり、象徴的である。Haddo をしめ殺したのにもかかわらず死体がないことに対する Susie の疑惑に対しても、すぐ分ると Haddo 邸に彼等を急がせたことなども細かい点ではあるが、最早、神秘の力を信じざるを得なかった事を暗示していると思われる。特に、homunculi の姿を見た時の魅せられたような Arthur の姿は、完全に魔力の虜を感じさせるもので、グリム・ヒューマーをただよわせる自然主義的描写にとまわられて極めて印象的に Arthur の敗北を浮きぼりにしている。しかも、この冷やかな雰囲気は、生命の神秘を得て死んでいる魔術師に対して、その最後を飾るでも、歎くでもない気分を効果的に捉え表現している。魔法使は遂には焼き殺される運命にあるだけなのであろう。現代の魔術師であろうとも。

こういう怪奇小説を促す一つの大きな原動力と目されるものに耽美主義がある。モームが若い頃、世紀末耽美主義の影響下にあったことは否定出来ない事実で、モームの辿りついたペルシヤ絨毯に表明される人生観の根底に流れるものはこの審美主義である。パリーで、もっとも眼を開かせられたのは、美術であるといわれている。これを端的に現わしているのは、Haddo が Margaret を魔術にかける際 W. Pater の La Gioconda についての讚嘆の言葉の朗誦から、ピアノを演奏する所までであろう。Pater の La Gioconda に寄せる蜜のような賞讃の言葉を朗誦する所は『人間の絆』第四十四章で、Philip が Miss Price にルーヴルに案内され、この絵を見た時の件と全く符合している。(彼女は、まず「モナ・リザ」を見せてくれた。世にも名高いこの絵については、W. Pater が実物にまして、その美を高調した、あの宝石のような言葉を彼は、ほとんど暗誦出来る迄に読んでいたので、それをそのまま、Miss Price にくり返した。)次に da Vinci 論に Haddo の話は移り、絵画の限界を超えた何物、人間ばなれした情熱への憧憬の何物かを表現しようとしている彼の神秘的な絵を説明し、Valdes Leal の描く牧師の絵に見られる人生の美の喪失、そのいくつかに見られる頽廃ということに注意させ、Gustave Moreau に感じられる秘教性、罪悪感、ローマのデカダンス、ルネッサンスの悪徳に注目させる。勿論、魔術師の美術論で、我田引水の見方かと思われるが、同時に、パリーで開眼させられた新しい美術観の投影がにじみ出ているように感じられる。即ち今迄は何か漠然たる理想主義をもち、また選ぶ画題の下に何か哲学的思考らしいものをひそめている画家を好んでいたが、後期印象主義の時代で、新しい標準で再認識しようとする風潮の中であって、新傾向の作品を見た時、彼の感じたことは、今迄のものとは全然異なり、倫理的訴えなど一つもなく、より純粋な高次の生活に導いてくれるものではないということだった。感覚を只麻痺させるような美の世界であった。現実への顧慮は消え、官能の、神秘的の美の

世界があるだけであった。音楽も、又此のようであつたらう。Haddo の奏でるピアノを聞いて Margaret の心には Herodias の娘の映像が去来し、彼女をつぶやき“*I am amorous of thy body, Iokanaan!……There is nothing in the world so white as thy body. Suffer me to touch thy body.*”が彼女の耳に響いてくる時。

6

最後に、同一系列に属すると思われるいくつかの作品を紹介すれば、短篇では、Dr. Porhoët のようなオカルティズムの權威の出てくる *Lord Mount-draco* (“*The Mixture As Before,*”1940)があるが、医師の臨床記録ともいふべきで、ストーリーとして消化されていない。次に Haddo 的な名残りをさせる美の使徒 Strickland の登場する *The Moon and Sixpence* (1919)、ヨガ的神秘家 Larry Darrell の現われる *The Razor’s Edge* (1944)、ユーモラスな宗教的雰囲気奇蹟が行われる *Catalina* (1948) などであろう。更に想像をたくましくすれば、モームが *The Hero* (1901) から、以後、全作品につけている、モーム・シムボルというモロッコで発見され、父親から受けついで、悪魔よけの手型を象徴する印が、モームの神秘主義に関連して、大きくクローズアップしてくるような気がする。